学位論文抄録表紙

日本における大腸進行性腫瘍の中の
平坦・陥凹型腫瘍と側方発育型腫瘍の割合
(Proportion of flat- and depressed-type and laterally spreading tumor among advanced colorectal neoplasia in Japan – importance as precursors of colorectal cancer)

加来 英典

指導教員
佐々木 裕 教授
熊本大学大学院医学教育部博士課程医学専攻消化器内科学

学位論文抄録

[目的] 本邦では以前から大腸の平坦・陥凹型腫瘍や側方発育型腫瘍（laterally spreading tumor：LST）が報告されてきたが、それらは平坦な外観のため発見されにくく、欧米での認知度は低いものであった。欧米では、大腸癌の大半は polypoid 型腫瘍から発生するとこれまで考えられてきたが、近年、平坦・陥凹型腫瘍や LST などの腫瘍が注目されるようになった。欧米での大腸癌スクリーニングの標的は大腸進行性腫瘍であるが、いくつかの平坦・陥凹型腫瘍、LST は大腸進行性腫瘍に含まれる。今回、平坦・陥凹型腫瘍と LST の重要性を評価するために、大腸進行性腫瘍におけるそれぞれの頻度と特徴を検討した。

[方法] 2002 年～2009 年に熊本市内の内視鏡検査専門医療機関において、全大腸内視鏡検査を受けた 40～79 歳の受験者を対象とした。大腸癌の罹患危険度が平均的集団になるように、対象者を無症状の初回検査者に限定した。対象者で発見された大腸進行性腫瘍を解析し、その中の平坦・陥凹型腫瘍、LST の頻度を調べた。大腸進行性腫瘍としては、10mm 以上の腺腫、絨毛成分が多い腺腫(villous adenoma)、高度異型腺腫（high-grade dysplasia)、浸潤癌（invasive cancer）と定義した。腫瘍の肉眼的形態を検討する際は元々の形態が推測できない進行癌を除いた腫瘍群で検討し、肉眼的形態は日本内視鏡学会分類に準拠して分類した。

[結果] 最終対象者は 4,910 人（男性 2,116 人、女性 2,794 人）であった。大腸進行性腫瘍は男性の 7.9%(168/2,116)、女性の 4.7%(131/2,794)、対象者全体の 6.1%(299/4,910)に認められた。浸潤癌は全対象者の 0.5%に発見された。形態学的に polypoid 型は大腸進行性腫瘍の中の 75.3%を占めた。一方、平坦・陥凹型腫瘍は 7.5%、LST は 17.2%を占めた。平坦型腫瘍のほとんどは低～中等度異型腺腫であった。逆に陥凹型腫瘍の 40%は T1 癌であり、非常に悪性度の高い腫瘍であった。また LST の約 80%は右側結腸に存在し、LST の 30%以上は高度異型腺腫あるいは T1 癌であった。

[考察] Polypoid 型の大腸進行性腫瘍は大腸癌予防のための第一の標的であるが、日本において平坦・陥凹型腫瘍、LST も一定の割合を占めていた。とりわけ陥凹型は悪性度が高いと考えられ、早期発見、早期治療が望まれる腫瘍である。欧米では近年右側結腸癌が減少しないと報告されているが、その理由として右側結腸に多く存在し発見しにくい LST が関与している可能性が示唆される。

[結論] 平坦・陥凹型腫瘍、LST は大腸癌前駆病変として重要な腫瘍であり、それらの存在を考慮した大腸癌予防戦略を確立する必要があると考えられた。